

B 145 既婚婦人の着装行動および衣服の所持状態

共立女短大 ○杉田洋子

共立女大家政 小林茂雄

目的 服装に対する意識と行動を、人間の複雑な生活意識や生活システムとの関連からとらえようとして、これまでに生活態度と衣服の所持状態について分析し、昨年度本年次大会で報告した。本研究においては、生活態度による着装行動の差異について検討し、衣服の所持状態と基本属性とのかかわりについても追求することを目的とする。

方法 I. 生活態度と着装行動：(1)前報と同一調査で一シーズンにおける11場面を設定し、あらかじめ用意した52種の服装の選択肢の中から、場面毎に着たいと思う服装を2位まで選択させる。(2)場面毎に選択された服装の単純集計を行う。次に前報の各生活態度と場面別とのクロス集計を行う。II. 衣服の所持状態と基本属性：前報の洋服、和服、全体別に衣服の所持枚数得点と年齢、住居形式、住居面積、仕事の有無の4変数との関連を数量化工類を用いて分析する。

結果 I. 場面毎に選択された52種の服装を、1位について組合せ服、スーツ、ワンピース、和服の4種にまとめて集計を行った結果、選択された4種の服種間に有意差のある場面(家事をする場合など7場面)と、ない場面(デパート、レストラン、クラス会、観劇の4場面)があった。後者において、生活態度による着装行動の差異は、各因子の十一グループ間のクラマー関連係数の差から、上位より社交性、他人意識、堅実性、針仕事愛好、礼儀正しさの順に場面により選択する服装の態度に違いがみられた。II. 数量化工類の結果、和服の所持枚数は4変数の予測式により推定出来た。又、4変数のうち、住居面積は洋服和服とも偏相関係数が有意であり、年齢は和服のみが有意であった。